

1969・代表作時代小説

代表作時代小説

昭和四十四年度
日本文藝家協会編

和田芳恵
山岡莊八
村上元三
武蔵野次郎
尾崎秀樹
編纂委員

東京文藝社

昭和四十四年度

代表作時代小説

九〇〇円

無検印

承認

昭和四十四年十月五日印刷

昭和四十四年十月十日発行

編纂者 日本文藝家協会

発行者 角谷奈良雄

発行所 株式会社東京文藝社

本社 東京都新宿区西大久保三一・二六

出張所 東京都新宿区弘方町一番地

振替、東京二一七五七

電話、(三〇)二五五〇

まえがき

時代小説が、今ほど求められていることが、あまり無さそうなのに、案外、書き手が不足しているらしい。編集者の、誰もが、この事を言う。現代小説が、時代小説とくらべて、決して楽だとも思わないが、基礎知識を身につけるまでに、かなりの忍耐がいる。時代小説を読むたのしみは、こういう習練の賜をあじわいたいという点もあることを見逃すわけにはゆかない。

今度の選考には、その作品の年代を明治まで繰り入れて、間口も広げた。明治も遠くなくて、対象として採りあげても、別に違和感はなかった。「代表作時代小説」の新らしい試みと言えるだろう。

リストにのった作品数は二三九編。この中から二十二編が選ばれた。

枚数が収録作品としては長すぎたもの、連作もので、一冊にまとめられる予定のため、この選集にはいらなかった作品もあったが、委員会が推した作品は、ことごとく収録された。この場合、同じ作家の作品で、次善と思われたものが作者の都合で収められたという

例は一編もない。したがって、文字通り、年間の代表作選集ということが出来る。私たち委員は、この点に誇りを持つことができた。

私は委員のなかで場ちがいの存在であり、時代小説の実作家でもなければ、また、今の読者の動向を知った批評家でもない。この点、「まえがき」の筆者としては、気おくれもするが、何物にも捉われない自由な感想を述べる立場にはある。

鷗外の「歴史其儘と歴史離れ」の理論に出発した時代小説は、自由奔放な大衆文学の大きな流れをくぐって、知的操作を加えた近代化に成功した。

現在の時代小説の水準は、これまで見る事ができなかった高度な発展をとげた。

この成果は、先行作家の努力を、現在、第一線に活躍する作家たちが、どのように拡大深化したかということになるが、終戦後の歴史家の新しい分野への発掘作業におうところも多い。

時代小説の読者層も、戦前の限られた一部から、女性もまじえた広がりを持つようになった。

このせいか、時代小説に名をかりた作品が紙上をにぎあわすことにもなった。

どうして時代小説にしなければならぬのだろうかと思われるような、まやかしものが、大手を振って通るようにもなった。

それが、時代小説の仮面をつけたものであったり、借し衣裳屋から損料をだして持ち出

したような、しろものである。

つまりは、読者をなめた仕事ということになる。

私が、ここで批難しているのは、天馬空をゆく空想力からうまれた作品でないことは、言うまでもない。

正しい史観に立脚して、思う存分、あばれまわってみせるような作品が、数少ないと思うほどである。

時流に乗って、時代小説を安易なものと考えたような多くの作品に突きあたった気がするので、思わず苦言を呈する次第である。

良貨が悪貨を駆逐した例は、ほとんど無かつたのではなからうか。

作家自身が、自戒する必要もありそうである。

ここに収められた二十二編は、いろんな傾向を示している。その頂点を捉えたという満足感が委員の表情から察知された。

心ある人たちは、この「代表作時代小説」を座右に置いて、作品の真贋を見抜く指針に役立てる一方、時代小説の持つ醍醐味を充分に賞味されたい。妄言多謝。

和田 芳 恵

目 次

谷中・首ふり坂	池波正太郎	九
火 矢	一色次郎	三
草 の 声	伊藤桂一	四
豚とさむらい	神坂次郎	五
女 狐	小松左京	七
柄 師	五味康祐	九
天 流 斃る	早乙女貢	二九
故郷忘じがたく候	司馬遼太郎	二五
蚤 さ わ ぐ	杉本苑子	一五
東海道島田宿	多岐川 恭	一五
三 弥 ぎ くら	滝口 康彦	三五
雲の上の白い旗	武田八洲満	三五

橋の上	立原正秋	二三
筆屋の養女	戸板康二	二五
卯三次のウ	永井路子	二五
剣獣	南條範夫	三三
思 い 草	新田次郎	三三
さんま焼く	平岩弓枝	三九
佐渡の埋れ火	水上勉	三七
此ノ件嚴秘ノ事	村上元三	四四
柳生の金魚	山岡莊八	四七
非情なる事情	山手樹一郎	五七

まえがき 和田芳恵
 あとがき 尾崎秀樹

谷中・首ふり坂

池波正太郎

作者のことば

池波正太郎

この小説は、めずらしく、一冊の参考書、一片の資料も机上におかず、一気に書いてしまいました。

登場人物はいずれも、むかしの私知っていた人びとで、それを時代小説の世界へスムーズにとけこませることだけを考え、その考えがまとまると、いつもは四、五日かかる短篇が、二日ほどで書きあげりました。

著者略歴

大正十二年一月二十五日、東京浅草聖天町に生まる。

〔郵一四一〕品川区荏原二―一―二

長谷川伸に師事す。

日本文芸家協会々員

劇作者（主として新国劇上演）を経て「錯乱」により昭和三十五年上半年直木賞を受賞

一

「こわいのか?……え、そんなにこわいのか、女房どのがよ」

ずばり、金子辰之助に指摘をされると、さすがに「その通り」だともいえず、三浦源太郎も騎虎のいきおいというやつで、

「なあに……」

と、胸を張り、

「行く。行くとも」

きっぱり、こたえたものである。

「よろしい。それでこそ男だよ、おい」

辰之助はふとい鼻をうごめかし、毛むくじやらのたくましい腕を突き出し、がっしりとした体軀をゆさぶるようにして、

「さ、出かけよう」

立ちあがった。

よく晴れわたった晩春の昼さかりであったが、この湯島横丁にある「千草屋」という茶漬やは大繁昌で、入れこみの大座敷には客がいっぱいである。

温飯に季節の魚菜をそえた「五色茶づけ」というのが此店の名物だ。

源太郎は、辰之助に肩を押されるようにして、奥の小

座敷から庭づたいに外へ出た。

下谷・二長町の屋敷がとなり合せて、幼年のころからの仲のよい友だちの二人なのだが、気質もちがえば体質もちがう。

神田・相生町に一刀流の道場をかまえる井狩又蔵の門下で、剣術のほうでは相当な腕前の辰之助はいかにもそれらしい風貌の所有者だが、源太郎のほうは長身ながら腰に横たえた大小の刀に足がふらつきかねぬたよりなさで、

「親しゅうねがっている間柄ゆえ、はきと申しあぐるが、このお子は、よほどに気をつけなさらぬと二十までは保ちますまい」

と、源太郎の実父・永島左内の友人で、表御番医師をつとめる吉田九淵が、源太郎が生れて間もなく、両親にもらしたこともあるそうな。

そのことばのとおり、幼年から少年時代にかけて、年中、病氣ばかりしていた源太郎だが、十七歳の夏の大病の後には、すっかり病みぬいてしまったものか、めきめきと丈夫になり、その素直な人柄を見こまれ、

「せひ、むすめの嫁に……」

と、江戸城・本丸留守居番をつとめる五百五十石の旗本・三浦忠右衛門の養子に入ったのが、今年の正月であった。

その三浦家の長女・満寿子、年齢は二十歳。武家のむすめとしての教養百般に通じているという。

これが何かの折に、路上で源太郎を見かけ、その美男ぶりに、

「永島様の御次男なれば、よろこんでわたくしの夫に……」

父の忠右衛門にいったとかいわぬとか……ともあれ源太郎は、養子縁組には申しぶんのない三浦家へ入ったということになる。

なにぶん、武家の次三男は養子口がなければ父や兄の世話になったまま、肩身のせまいおもいをしながら一生を送るより仕方がないのだから、実家の父も兄の主馬も大よろこびだったし、むろん、源太郎自身もほっとするおもいであったのだ。

「いや、めでたい。めでたいにはちがいないが、あの三浦のむすめの面はまずいよ、おい。そのことだけは寛悟しておけ」

いつか金子辰之助が源太郎にいったことがある。なるほど美女ではない。どこかこう、ずんぐりした小柄な体つきだし、小さな両眼が妙に白く光る、いくらか三白眼の、やぶにらみじみた人相で、鼻の穴が正面からはっきり見える。それにしても二十歳の肌のかげやきは、彼女の顔をさほどみにくいものと源太郎に感じさせなかった。

た。

自分と同じ次男坊に生れた辰之助が、

（私をうらやんでいるのだらう）

彼のにくまれ口にも、源太郎は寛大な微笑をもってこたえたのみである。

ところが……。

いざ満寿子と夫婦のちぎりをかわし、三浦家の人になつてみると……。

さあ、いけない。

俗にいう「処女の生ぐささ」というやつで、一月もすると源太郎、げんなりとしてきた。

これまで源太郎は、まったく女の肌身を知らなかったわけではない。

そこはそれ、金子辰之助のような幼な友だちがついていたことだから、彼の案内で数度、岡場所へ足をふみ入れたこともある。

むろん、新妻の満寿子は処女であつたけれども、新婚の日々が経過するにつれ、次第にどのような味わいをおぼえこんだものか、すこぶる大胆な所作をするようになった。大きな鼻の穴を層倍にふくらませて鼻息も荒々しく、不様に身もだえする態が露骨をきわめはじめ、

（ああ……岡場所の女たちのほうが、ずっと、つつましやかだし、色気もある。こ、これが……これが五百石の

旗本のむすめなのか……)

と、源太郎は興ざめがしてきはじめた。

それでいて、日中の満寿子は、夜の狂態など、どこのだれがするのか、といった顔つきでつんと見識高くすましこんでい、なにかにつけて、源太郎を養子あつかいにするのだ。父母はもとより、奉公人や来客にいたるまで、満寿子はおのが教養の高さをこれみよがしにただよわせ、気取りきっている。

さらに、である。

一心流の薙刀の名手だとかで、この新妻の膂力なりぢからの強いことは大したものだ。

夜のひめごとの最中、真剣に相手をつとめている夫の源太郎の背中へ、満寿子がむっちりとした両腕をまわし、いきなり、

「うむ!!」

妙な声を発してしめつけると、恐ろしい痛みが走って、

「あっ……」

源太郎、おもわず悲鳴をあげてしまう。

夫の、その悲鳴がおもしろいのか、

「うふ、ふふ……」

新妻は、気味のわるいふくみ笑いをもらし、

「いかが、いかが?」

尚も、強くしめつけるのだ。

「これ……よさぬか。やめて下さい」

「うふ、ふふ……いかが?」

「痛い。あ……あつ、痛い……」

「うふ、ふふふ」

腕のちからをゆるめたかとおもうと、今度はもう火焰のような鼻息を夫の顔へ押しつけ、強烈な愛撫を要求するのであった。

(ば、ばかにするな、おのれ……)

あきれ果てて男のちからも萎え、満寿子の体からはなれてしまうと、さあ承知をしない。手をねじられたり、尻をつねられたり、さんざんにいためつけられ、二十六歳の源太郎が翌朝、体の痛みに耐えかねて床から起き上れないことがあったほどだ。

養父の三浦忠右衛門は、まだ退役前であるから、御城へ出て行くけれども、源太郎は一日中、屋敷にいて、この新妻の相手をしなくてはならない。

薙刀の相手をつとめさせられたこともある。

源太郎の剣術なぞというものは、まるで無きにひとしい、というわけだから、これまたさんざんに叩きのめされる。

かといって、これを実家の父母や兄にうったえるわけにもゆかぬ。みつともなくて、だれにはなしもできぬ。そうなれば、源太郎のこぼしばないをきいてくれるのは、

金子辰之助のみといてよい。

すべてをきいて辰之助は大笑いをした。

「おれならなあ。おれなら、満寿子どのを見事、屈服せしめてくれようが……ふむ、そうか。そんなに源太。夜になるとすさまじいのか？」

剣術も好きだが色事も大好きという辰之助は、異常な興味をそそられたらしく、夜の闇房のありさまを執拗に問いかけてやまない。

「ふむ、ふむ、なるほど。しかし、おれならなあ、おれなら……」

であった。

それほどに自信があるのなら、いっそ辰之助に代ってもらいたい。自分は部屋住みの身で、ひっそりと実家の厄介者で一生を送ってもいいのだが……と、つくづくそうおもふのだが、いったん、養子に入った自分が自分の一存で勝手なまねはゆるされぬ。そこは現代より百何十年も前の封建の世であるから、実家・養家の恥さらしになることは何としてもつしまねばならない。

「それほどは我慢しろ。五百石の家の主になれる身ではないか」

と、辰之助はうらやましげにいう。

「それはそうだがなあ……」

「いっそ、満寿子どのの縁談が、おれのところへ来れば

よかったのに、な」

「ああした女を妻にしたいのか、辰之助さんは……」

「おもしろいではないか。夜のその、すさまじいところなど、大いに気に入った」

「そうかなあ……」

五色茶づけの「千草屋」で酒をのむうち、

「たまには息ぬきもしろ」

と、辰之助がすすめ、

「近ごろな、ちよいと、おもしろい遊所を見つけた。どうだ？」

「うむ」

わるくなくと思った。毎夜の満寿子ではたまったものではない。そつと浮気をしてやるも、いえば猛妻への復讐というわけであった。

「夜は出られぬぞ」

「むろん、昼間さ」

そこで、五日後の今日となったわけである。

二

その日。

金子辰之助は三浦源太郎をつれ、上野・不忍池の東をまわり、谷中へ出た。

谷中・天王寺門前から駒込の千駄木へ通ずる道の、兩